熊日1971.09.26

日本化学会を追及

宇井東大助手らと告発する会

【大阪】「新潟水俣病裁判結審聞ぎわに〝加害企業弁護人〟の北川徹三横浜国大教授を特別講演に招き、世間を惑わす仮定ばかりの言説を発表させた日本化学会の責任は重大だ」―フィンランドの新聞に〝歩く爆弾〟と紹介された東大工学部助手宇井純氏と大阪の若手研究者が、わが国最大のマンモス学会日本化学会（会員三万六千人）に〝挑戦状〟を突きつけ、十月十一日から東京で開く同会第二十五年会で、未認定患者問題を中心とした水俣病の最近の調査事実を共同報告する。これと合わせ、大阪・水俣病を告発する会は全国の反公害団体に「公害の温床・日本化学会告発行動」を提起しており、日本化学会はこの秋、内外から大揺れに揺さぶられそうだ。

宇井氏と大阪市大工学部院生・井関進氏の共同報告は「水俣病の原因と発生時期について」と題して、三日目（十三日）の環境汚染部会で発表される。

この中で新潟のケースについては「原因は新潟地震で信濃川河口倉庫から日本海に流出、塩水クサビで阿賀野川をさかのぼったフェニル水銀農薬という北川説＝昭電説は❶塩水クサビは最大七㌔㍍しかさかのぼらないのに、河口四十㌔㍍上流のネコの骨から異常な水銀量が検出された❷新潟地震の一年前採取の川魚から最高九・九三PPMの高水銀濃度が検出されたーなどから時間空間的に否定された」と論じている。

一方、水俣病を告発する会は九月四日の一周年集会で「学会の最高レベルを示す四月の特別講演で北川インチキ学説を発表させた日本化学会の体質を、水銀の恨みをこめて告発しよう」と行動を呼びかけた。北川講演は「化学プロセスと公害」というテーマで、問題とされたのは新潟水俣病の「塩水クサビ農薬説」のほか❶熊本水俣病は昭和二十八年―三十五年にだけ起こり、それ以前と以後はチッソはいっさい無関係❷石油精製工業は最も公害の少ない産業❸製鉄所の赤い煙は健康には無害ーなどという内容だった。

告発する会は当日の会場・東大駒場で、デモ、ビラまき、集会アピールなどを予定、北川教授派に水俣病に関する公開論争をいどむことを計画している。